

土方巽の暗黒舞踏における「東北」

李裁仁(東京大学)

舞踏とは、1950年代末から1960年代にかけて土方巽、大野一雄、笠井叡によって生み出された日本の新しい舞踊である。その中でもとりわけ土方巽の舞踏は「暗黒舞踏」と呼ばれた。これは当時日本のダンス界で主流を占めていたモダンダンス、バレエに反抗し、慣習化された様式や規範、作品の全体性を解体するのみならず、身体を単なる再現や表現の媒体として用いることに反旗を翻したもので、20世紀舞踊史の中でも大きな意義を持つ日本の前衛舞踊として一般的に評価されている。初期の舞踏は、『三田文学』1961年1月号に掲載されたエッセイ「刑務所へ」において土方が述べているように、既存の芸術的な価値判断に関する枠組みからの逸脱を図りつつ、「無目的な肉体」を提示するものとして特徴付けられる。

これに対して70年代になると、土方は自らの故郷である秋田=「東北」を示すような舞台を練り上げたと評価されている。この時期の代表的作品である<四季のための二十七晩>(1972)において土方は、舞台装置、衣装、音響などに関して東北を喚起させるような要素を用いた。ゆえに当時多くの批評家は土方の舞踏の動きを「がに股」、「構え」などといった言葉で描写し、土方の身体の中に「東北」の農耕民族的な動きを見出すに至った。こうした「東北」という特徴を組み込むことによって、単に前衛的で実験的なダンスと見なされた土方の舞踏は、新しい舞台芸術ジャンルとして広く認められるようになったのである。

しかし、土方の舞踏を「がに股」や「構え」などを通じた「東北」の再現とする解釈は、彼の前衛的な身体論とは矛盾するようにも思われる。というのは、土方が舞踏において常に目指していたのは「無目的な肉体」であったからである。本発表は、このような舞踏における身体の前衛的無目的性と再現性を巡る問題意識から出発するものである。本発表の目的は、「東北」が後期舞踏においてどのように位置づけられるのかを改めて問うことにある。

そのために、第一に土方の身体論、特に舞踏創作の場面で言及される「なる」という概念に注目したい。「なる」とは、土方の弟子であった三上賀代によれば、あらゆるものに「メタモルフォーズ」することを意味する。こうした「なる」という概念に基づいた創作を通じて土方がいかなる動きを目指したのかを、まず土方の言説に基づいて検討する。その上で第二に、市川雅や合田成男など、当時の舞踏評論家たちの評論と土方の「東北」に関する言説を資料とし、土方の後期舞踏において「東北」がいかなる様相で現れたのかを理解する。このように、「なる」という概念に基づく土方の身体論を軸にして土方の後期舞踏を振り返ることで、土方にとって「東北」とは決して踊り手の身体によって再現され喚起されるべきものではなかったことを示す。